の末と合して、乳頭部と後頭鱗の下側緣との縫目をなせり。

赤兒の顱には縫目なし。骨と骨との間は開きて、皮の外唯伸縮すべき膜あるのみ。又稚きときに縫目一たび生じて、長ずるに及びて、兩骨相合し、縫目の痕滅ゆるところあり。例之ば額骨は幼時左右兩片より成りたり。額骨の開きたる儘にて相合せざるを十字頭といふ。腦の未だ全く發育せざるに、顱骨の接ぎ目早くも合したるときは小頭(Mikrocephal)となる。小頭は痴人の徵なり。又顱の一側の縫目早く合したるときは斜頭となる。斜頭には智者も魯者もあるべし。ダンテDanteは著るき斜頭なりしかど、千古に卓越したる詩人なりき。

頭顱の完形

頭顱の常形は廣き端を後に向けたる卵圓なりとは上に云ひきされど上より見たる形の長きと短きとは、人によりて異なり。此卵圓の前後徑を長さとなし、其左右の徑を廣さ又幅となし比較するに、其割合はさまざまなり。世に所謂長頭は、長さの幅より大なること著るく、方頭と呼ぶは幅の割合に廣きなり。人類學者は此間に明なる等差を立てむとて、兩徑の比例を算測し、民種を別つ標準に用ゐたり。其法は、鼻枕若くは額の最凸處と後頭棘の最凸處との間を測りてこれを縱徑とし、頭骨耳上の最遠距離を測りてこれを橫徑とし、最長なる縱徑の寸法に對する最短なる橫徑の寸法を、百分率によりて算出すること、猶上膊に對する前膊の寸法を測定するが如し。(第百二十五頁を見よ)これを頭顱の示數。Indice Céphalique といふ。

頭顱の示數小なるものは、橫徑割合に短かく、縱徑を百としたるとき、其數七十五若くはこれより小なり。これを長顱 dolichocéphale といふ。橫徑の廣きものは示數八十三以上なるあり、これを短顱 brachicéphale といふ。兩者の間にして、示數七十七乃至八十なるときは、其頭を長短の中 Mésaticéphale といふ。

顱形によりて民種の特徵を別たんとする者は、餘りに此標準に重きを措くに過ぎたり。瑞典の解剖家レッチウス Retzius は、歐羅巴の土着民種を短顱なりとし、外來の族を長顱の民なりといひき。然れども近年に至りて、バスク人の長顱なること證せられ、太古層の地底より掘り出せる人骨にも長顱を發見せるにより、其說敗れたり。唯現今世界の民種中にて、最も顯著なる例のみを擧れば、濠洲人、ホッテントット、ヌビア、カフル等の亞非利加黑人は長顱にして、瓜哇人、安南人、ラポン人、オヽヱルニュ人は短顱なり。ノルマン人、荷蘭陀人、殊に十二世紀以降の巴里人は長短の間なり。

頭の骨は幼時頗軟なれば、民俗によりて其形を變ぜんことを務むるものあり。こはいと古き事なり。頭の特に長き民の事をば、ヒポクラテス及プリニウスが記しゝものあり。ヒポクラテスのいはく、貴族として貴ばるゝ巨頭の人(Macrocephali)をば、當初故意に造りしなるべし。されど世の遷り變るにつれて、父子相遺傳し、特にこれを作ることを要せざるに至りしならむ云々。プリニウスはチラズス Cerasus といへる古市のほとりに捿みし巨頭の民の上を記述せり。斯く古人の記錄に殘りたる巨頭をばトオリエン Taurien 半島ケルチュ Kertsch に近きところにて、圓錐形の古墳の間より掘り出しき。解剖學者ラアトケ Rathke はその「マクロケファリイ」なることを證しき。

第十六世紀の解剖家ヱザリウスは、嘗て云ひけるやう。獨逸人の後頭扁平にして、顱形短圓なるは、古へ故意に作しゝより起る。古の獨逸の婦は、多く其子をして仰ぎ臥さしめき。白耳義にては、これに反して、赤兒をして側臥せしむる習なればかしこの民は今も長顱なるもの多し云々。こは固より容易く信ずべき說ならねど、かく古き學者の、能く民種によりて頭に長短あることを知りたるは、珍しかるべし。

面骨

顏面とは頭蓋の前下方をいふ。通常額を顏面に屬せしむれども、こは解剖學の取らざるところなり。主として官能の器を容れ、又氣道、食道の門をなす。これを作りたる骨は凡十四。其中無對なるは二骨あるのみ。骨の接合は嚙縫を以てす。下顎骨を除く外動かすべからず。面骨の形は楔の如し、楔の底は鼻根より顱に達せり。楔の頂は鈍くして、後頭の孔のほとりにあり。

面骨中の要あるものは上顎骨、鼻梁骨、顴骨及下顎骨なり。其他の骨は內部にありて、毫も外形に關係なし。

上顎骨(第六十四圖 M.S 第六十六圖 S)は面骨のおもなるものにて、左右對あり。顏面の中位を占め、上は眼窠の內隅を作り、中は鼻腔の兩側をなし、下は鼻前に於て兩骨接合したり。此骨の體は中空なり。所謂ハイモル Highmor が洞これなり。體雅に頰顴上顎通鼻之竅也とあるを、これに當つべきにや。洞は鼻腔に連れり。

骨の前面、眼窠の下緣より下少し窪みたり。これを頰窩といふ。(第六十六圖 S)顏

長き人にては、頰窩深くして知り易く、顏短き人にては、淺くして知り難し。頰窩の上方に小孔あり、下眼窠孔といふ。(第六十四圖 F. S. O)神經及脈管の通路なり。

上顎骨を一つ離したるときに、二樣の尖りあり。上額の方に昇るを上行枝といふ。鼻梁骨を受けて鼻の側壁となり、又眼窠の內緣に當る。外方にあるを頰突起とす。顴骨と嚙縫をなす。左右兩片の相會する鼻腔の下、眞中に當りて前鼻棘(第六十四圖 F. N)あり。鼻の隔障の着處にして、カムペルが面角を測る標點とす。

第六十六圖

首骨前面

下緣を齒槽突起といふ。所謂上牙床(上齦基)にして、齒根を宿せしむ。每骨八齒あり。齒根太きときは、牙床の齒を受るところ膨らみたり。內側は口內に折れこみ、犂頭骨と俱に口腔の上壁をなせり。

鼻梁骨

鼻梁骨又鼻骨(鼻柱、鼻準、鼻髑、顚、素、明堂骨、面王、方上○第六十四圖 O. N)は鼻の骨梁なり。鼻根に接し正中線上に跨りたり。對骨にして鼻腔の上部を掩へり。上は額骨に接合し、側面は上顎骨に連る。鼻骨の前面は上凸下凹なり。人ごとに大さ同じからず。鼻隆き人の鼻骨は大にして、鼻低き人(黑人、濠洲人)のは小なり。

顴骨

顴骨(頰、鼽、鳩、兌骨、大顴、面鼽骨、面鳩骨、肫、頞、顚、關○第六十六圖 H)は顏の兩側にあり。四枝四緣あり。中央の高處は顴をなす。所謂顴丘(輔角)是なり。四枝の最長きは上枝なり。額骨外眼窠突起と會して眼窠の外下隅を限る。前枝と下枝との間は上顎骨と縫目をなす。後枝は顳顬骨の枝と合して顴弓を作る。下緣の粗なるところは咬筋の着く點なり。

顴弓は骨經に所謂、從目下至耳前、如架梁、其骨下空洞、容二指頭、乃面鳩骨也といふものの即是なり。まことや顴弓は顳顬の窪に渡したる橋梁なり。此橋下を過るものは顳顬肉の端なり。顴弓は其下緣のみ嚙肉に掩はれたれば、指頭其面を追ひて耳前に達することを得べし。

顴骨の形は人ごとに殊なり。其相殊なるや、上顎の形と顴弓彎曲の度と、皆俱に

變ず。瘦顔にては此骨の前下方際立ちて窪み、顴弓の上も陷りて其全長を見るなり。

顔面の三骨を究めて、下顎骨に移る前に記述すべきは、上の骨にて作りたる三つの竅なり。其二つは額の下に對をなせる眼窠にして、他の一は眞中なる鼻腔なり。

最目立ちて髑髏の顔の怖るべき因となるは眼窠なり。其形は中虛なる方尖塔に似たり。尖塔の頂は少しく內に偏りたり。尖塔の底は前口をなせり。眼窠の四緣中、內緣と外緣とは略垂直なれども、上緣と下緣とは外に傾きて降りたり。上緣を限りたるは額骨の眼弓にして、同じ骨は觀骨と會して外緣をなし、顴骨は又上顎骨と合して下緣を界す。內緣は餘り稜立たず、其下方に淚管の上口を見る。淚管は淚骨と上顎骨とにて作る。下は鼻腔に通ぜり。

眼窠の周壁を閉ぢたる骨板には、前に擧げたる諸骨の他に、內部に屬する骨ありてこれを補ふ。眼窠の深き奥には內方に圓孔あり。尖塔の頂はこゝなり。是れ視神經孔なり。その少し外に、斜に上に向ひたる裂處と斜に下に向ひたる裂處とあり。上の裂處の形は「コムマ」を倒にしたる如し。下の裂處はそれよりも狹くして長し。

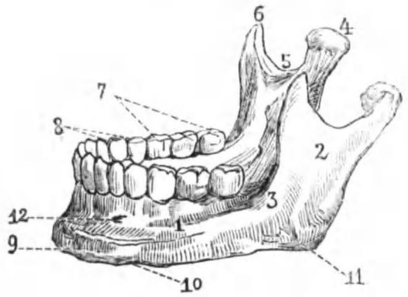
鼻の軟骨腐り去りたるときは、鼻梁骨の下に竅あり。鼻腔是なり。又梨子門(鼻窗、中血堂)ともいふ。其形は骨牌(カルタ)の心に似たり。門內は左右に分れて、其隔をなすものは鼻の隔壁なり。これを作るは犁頭骨と篩骨の鉛直板となり。左右の洞の後門は上に示しつ。前門の闕の中央に前鼻棘あり。外側壁には上より下に彎りたる三の骨板出でたり。此最下の骨板の下に、淚管の下口開けり。されど外よりは見えず。

其動くべきために大用をなすは下顎骨なり。(輔頂、頰、頰車、曲頰、巨屈、或骨、角、牙車、口車、頷車、鎌車、顴車、牙鈎、頰地、閣骨、角頷、曲頤、輔車、大迎骨、牙盤骨、兩釣骨、下巴骨、耳下曲骨○第六十七圖)語、嚙の他、面貌の變ずるときも此骨與りて力あり。曲りたる形は橢圓の半なり。下緣は皮を隔てゝ知るべし。

幼時下顎骨は左右の兩片より成りたり。其中線の上に合するところを頤接合といふ。側面より見たるとき、此骨を又二部に別つべし。その地平の位置にあるを體(第六十七圖一)といひ、上に向ひて斜に昇るを枝(同圖二)といふ。體と枝との折處を隅(同圖三)といふ。

第六十七圖

下顎骨



歐洲、亞細亞洲の民いづれを問はず、顏濶きは頤も亦濶し。頤尖の前には頤結節と稱して一塊あるを常とするに、頤濶き人には左右兩塊あり、相距ること二仙米以上に至るなり。頤には又鉛直なるあり、歪斜なるあり。斜にして前に出てたるは、貪慾奸黠の相なりといへり。此相は下顎の蹄鐵形狹きとき殊に甚し。俗に般若と稱する女夜叉及ひメフィスト Mephistopheles の面は其例なり。斯る腮にては下の前齒上の前齒の前に出づ。頤の斜に卻きたるは側面線(プロフィル)をも退走せしむ。斜に卻きたる頤に伴ひて下顎骨の全體低きものあり。かゝる頤にては下齒列上齒列の後にあり。

頤結節の外、下顎の體は微凹なり。こゝに小孔あり、頤孔といふ。(第六十七圖12)枝の內面より起りたる下顎管の口なり。管は齒齦にゆく神經の道なり。神經の端は頤孔より出でゝ下脣に至る。下顎の窪を後に限るものは外斜線なり。(同圖3)上に向ひて枝の前緣となる斜線の後は粗面をなす。咬筋の着くところなり。

下顎の上緣は上顎と對して下牙牀(下斷基)をなし、十六齒を列ねたり。下顎の下緣は骨厚くして、顏の下界となれり。生人にて口腔の下底を閉づるものは肉と皮となり。

昇枝の前緣は骨薄く、後緣は厚し、上緣は半圓の截込をなす。半月狀截痕といふ。截込の後なる出先には節頭あり。關節突起(第六十七圖4)といふ。截込の前なるは顳顬肉の着處なり。これを烏喙突起(同圖6)といふ。節頭は橢圓なり、而して其長軸は橫なり。關節突起と烏喙突起とは大抵同じ高さなり。

下顎の形は齡に從ひて殊なり。生後第六月の頃まで唯曲棍の如く、低くして圓し。其出先は短くして顱底にひたと着きたり。大人にては體と枝と俱に長じて其角九十度を超ゆること少許なり。老人にては牙牀滅びて、隅角は鈍くなりたり。兒と老人との相似たるは、彼も此も齒なければなり。老人の上下顎には牙牀少き故に、これを合せんとするときは、下顎を甚しく動かし、頤を前に誘ふなり。されば老人の頤出でたるは、口を閉ぢたるときは殊に著きものなり。此時に當りて脣は齒なき顎の間に狹まれ、口の割れ目には復た紅緣を見ず。

上下の顎骨に植ゑられたる齒は、大人にて總て三十二枚あり。これを左右に中

分すれば、牙牀ごとに八對なり。これを前より後に數ふれば、門齒(前齒)二、犬齒(絲截齒)一、小臼齒(頰齒)二、大臼齒(奥齒)三の別あり。

齒の口內に露はれたる處を冠といふ。その齦につゝまれたる處を頸といふ。その牙牀の窠裡に沒したる處を根といふ。根には薄き膜あり、骨膜に同じ。根と窠との堅く聯りたるはこれがためなり。冠の被は珐瑯と名けらる。白くして黃を帶ぶるものと、白くして碧を帶るものとあり。動物體中尤硬きものは齒の珐瑯なり。

門齒は其冠鑿の如く、鋭くして物を截るべし、上列の門齒四枚の中、外なる二枚は狹く、內なるは廣し。下の門齒の大さは皆同じ。上の門齒の內の二枚は、時として下の門齒四枚と同じ廣さなることあり。

犬齒は俗にいふ牙(きば)なり。其冠圓錐の如く、物を裂くべし。此齒の大にして尖れるは食肉獸の特徵とす。犬齒の冠は、他齒の列を挺出したるさま著く、獨り其尖のみならず其側も亦出でたり。其根の太くして長きことも他の齒の比に非ず。此性は殊に上牙列にて甚し。

臼齒は頰の內に隱れて見えず。其冠に節あり、小臼齒に二、大臼齒に四なり。其根も亦分れたり。譬へば數個の齒合して一つになりたるが如し。故に其嚙面は濶くして、よく物を碎くべし。大臼齒は第一のもの最大にして、第二のもの之に次ぎ、第三のもの最小なり。或曰、開化の民にては、第三臼齒の發生すべき隙地なく、これがために其形漸く小なりと。第三の大臼齒は所謂智齒なり。同じ學者の說によれば、西洋人の上下牙牀は漸く狹くなりて、遂には智齒なきに至るべき期遠からじといふ。げにスピイにて掘出しゝ髑髏にては、智齒頗大なるに、今の人にては甚小なり。

七歲以前の兒には乳齒二十枚あり。乳齒は眞齒より小なり。就中門齒と犬齒とは、其冠の形眞齒に似たり。犬齒の後には、頰の乳齒一側に二枚づゝあり。小臼齒の祖先にして、其冠の形は眞の臼齒に似たり。

齒の發育の度は大に面貌を變ずるものなり。乳齒の出揃ひたる四歲の兒は、其顏早く既に赤兒に殊なり。其面の伸びたることは、特り冠の挺出したるためのみならず、齒根長ずると共に、牙牀其形を成すを以て、牙牀の長さも加りたり。眞齒の完備するは二十歲より二十五歲の間なり。

頭骨にて動くべきところは唯一つあるのみ。顳顬骨と下顎骨との節是なり。こ

れを下顎關節といふ。顳顬骨にては耳孔の前なる關節窩と、その前を限りたる頬突起の横の根と、共に軟骨を被りて節面となれり。此中に下顎骨の節頭を受けたり。關節窩と節頭との間には軟骨の板狹まりて、兩者の密着を助く。

關節部を包める囊靭帶は濶くして緩し、外には外側靭帶あり。內には內側靭帶あり。外側靭帶は、顳顬骨頬突起の下縁より出でゝ斜降し、下顎節頭の頸の後に着きたり。

此節のおもなる運動は口の開閉なり。口を開くときは下顎は下れり。此運動の始めは節頭と軟骨板との間に生じ、下顎の愈下るに從ひ、節頭は軟骨板を誘ひて、關節窩の內を後より前に轉せり。此時外側靭帶は張りたり。口を開くこと愈甚しき時は、外側靭帶は節頭を前に引寄せ、窩內を脫せしむ。節頭は遂に横根の下に來り、軟骨板は節頭の後にいざりたり。是に於て靭帶は直になりてやゝ緩みをなし、口を開くこと更に大なることを得べし。

口を開くこと愈大なれば、節頭の前にいざること愈遠し。口を閉れば、節頭は關節窩にかへる。稀れに口を開くこと甚大なるとき、節頭横根の前に引掛りてその儘留ることあり。俗に顎の掛金はづれたりといふ。漢法醫の所謂落架風なり。

掛金は多く欠伸の時、大なる果に嚙着くときなどはづるゝものなり。

節頭の居處の變るさまは、指にて按ずれば知らる。瘦顏にては、口の開くに連れて耳前に凸處を生じ、次第に其位置の變るを見るべし。これ節頭の前に推し出さるゝなり。

下顎關節は開閉の他、前後へのいざりと左右へのいざりとをもなすべし。此運動の續いて起るときは輪轉となるなり。上下の臼齒は實に挽臼の如く動けり。」

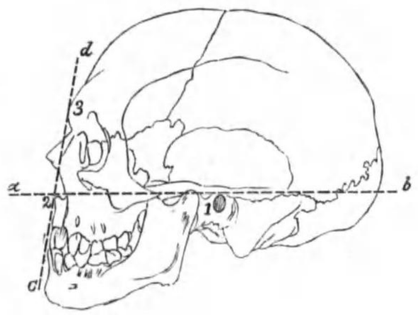
顱骨と面骨とは其發育の期同じからず。彼の形を成すは此より早し。さて彼と此とは相離れて其特形をなすことあり。例之面骨の小なる人にても、額は顱の全體と俱に大なることあり。概して精神のたしかなる徵なり。又面骨大にして顴弓張り、額は頭と共に扁小なることあり。こは概して受用を貪る徵なり。

人頭の獸首より美なるは、顱骨大にして面骨を掩覆するに足るためなり。概して面骨の前に出でゝ、額の後に逸したるは頭顱の大ならざる徵なり。面骨と顱骨との形の弔り合は民種によりて異なり、又人々によりても同じからず。始めてこれに着目したるは、第十八世紀の荷蘭陀畫家カムペル Camper なり。

カムペルは顱骨と面骨との發育を比せんがために面角を測り、側面線を度學

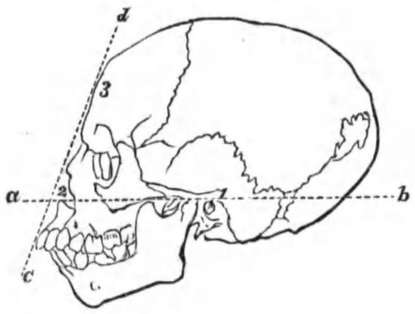
より考へて、度數によりて形の弔り合を示すことを工夫したり。カムペル以後解剖家及人類學者の面角に關する研究をなしたるもの多し。その測法も改められて漸く精しきを加へたり。されどカムペルが此測法を案じたるは、主として技藝家のために、人獸さま〳〵の骨相に就きて其特徴を知るべき手段を與へんとするもの　り。其測法の極めて簡易にして、啻に死骨を測るべきのみならず、尙能く生人を測るにも用ゐらるゝは、永く廢棄すべからざる所なり。

第六十八圖
高加斯人の面角



面角は二面の交會によりて生ず。(半面圖に於ては二線)一は地平の位置にあり。外耳孔より發して鼻腔の下界にある前鼻棘に赴くものを鼻耳線といふ。(第六十八圖ad)一は上下の方向を取り、額の中線の最高處と、上顎門齒の隆起とに觸るゝものを面線といふ。(同圖cd)こゝに出せる圖は皆カムペルが畫きしものなり。これを見るに人類の面角は直角に達するものなし。唯歐洲人の最美なる頭顱は直角に近しといふのみ。希臘名匠の彫像には、故らに額の大さを誇張して九十度を超えたる面角を與へ、以て人頭を理想化し、神靈又は人傑の神〳〵しき相を表現したるありこに出せる圖は又白人種と黑人種とを比べ猿の骨を參照して、其面角の減じゆくさまを示せるものなり。

第六十九圖
黑人の面角



カムペル曰、面貌の特徴を標する面線のなせる角度は、人類にて七十度より八十度までの間なり。これよりも昇るものは技藝の則に適當すべし、これよりも降るものは猿の類似に落つべし。面線を前に傾けんか、予は古像の神頭を得たり。これを後に傾けんか、予は黑人の頭を得たり。更にこれを後に誘へば猿の頭を得、これを傾くること愈甚しきときは犬の頭を得、遂に鵜の頭を得るなり。(Pierre Camper. Dissertations sur les differences

réelles que présentent les traits du visages chez les hommes de différents pays et de différents âges- (Œuvres posthumes. Paris, 1786)

カムペルが言へる所を明かにするに足るべき二三の實數を擧げむに、高加斯民種の普通面角は約八十度、蒙古民種は七十五度、黑人種の面角は六十度より七十度なり。是れ技藝家に取りて大切なる事にて、例へば黑人の圖を作るにあたりて其面色を黑くし、其脣を厚くせば足れりと思ふが如きは誤謬の甚しきを覺るべし。希臘末期の彫像にてベルエデェルのアポロンには九十五度の面角を與へ、(第七十一圖)アンチノウスの面角も亦九十度を超えたり。又同じ測法にて獸頭の面角を取りたる數は、「ゴリルラ」といふ大猿にて三十一度、(第七十圖)テエル、ヌォヴの巨獒にて二十五度、馬にて十一度なり。

第七十圖

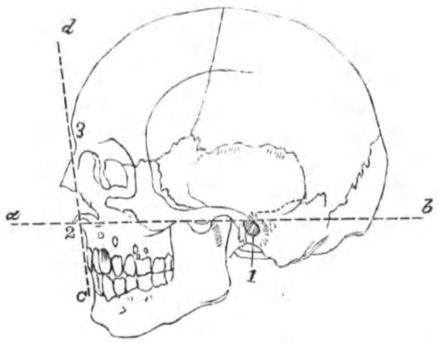
猿の面角

面角の法は人獸の特相を知るに便多しと雖、これを以て直ちに人獸の品質を判ずべからず。黑人には喙出で、所謂出腮 Prognathismus をなし、額は斜にして所謂逸する如き狀をなし、其頭首猿に似たりとて、これを人と「ゴリルラ」との中間に在るものゝやうにいひし人ありしが、斯般の黑人も歐洲人も、腦の重などには差別少なく、「ゴリルラ」の腦はこれに比して甚輕し。されば面角は以て咀嚼器の大小を知るに足ると雖、以て腦の浩纖を卜するに由なし、況や人獸の智愚をや。

面角の以て智愚を判するに足らざることは、大人小兒の頭骨を比べても明なるべし。赤兒の面角には九十度なるあれど智なし。赤兒の面角大なるは、頭腦已に大なれど阻嚼器未だ發育せずして小なるためなり。兒には長根の齒なし、牙牀低くして顏面の小なる所以なり。

第七十一圖

アポロンの面角



權衡總論

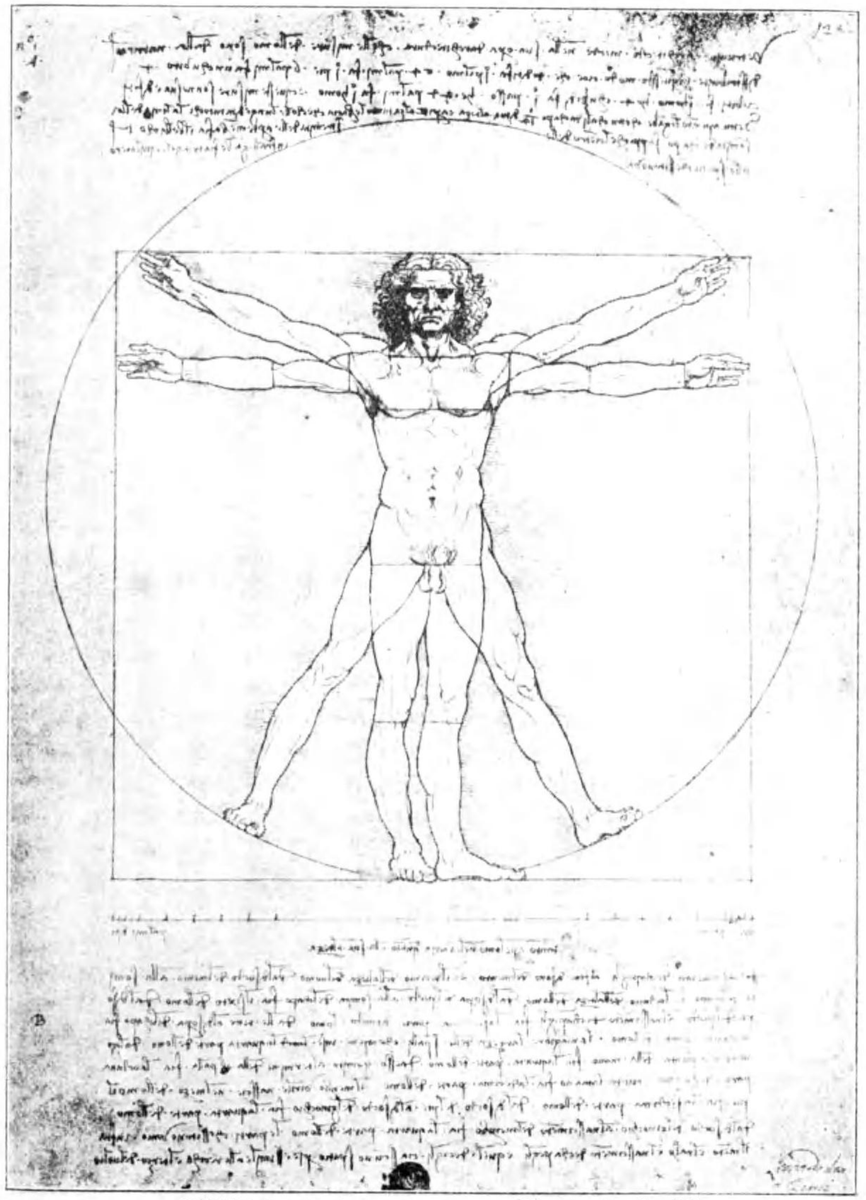
人身の權衡を知らんがために、原尺 Modul を用ゐて定めたる常の身長、常の身幅等これを人身の定尺といふ。定尺に從ひて立てたる諸法を根則 Kanon といふ。權衡論は人獸、草木、結晶等の實尺、比尺を研究する純學問上の用あり。又これを藝術に施す應用あり。其應用の方は既に四肢の條にも示したるが、こゝに頭首の骨を記し畢るにあたり、猶詳らかに古來の權衡論を說かんとす。

藝術に應用したる權衡法の最舊きものは埃及根則なり。其原尺は中指の長さを取りたりといふ說は、手骨の部に擧げたる如し。

希臘の藝匠中には種々の根則を立てたるものあり。最名高きはポリクレイトス Polykleitos が定めたる法なり。其權衡は「ドロス」族の莊重勇武の性を示し、體練に長じ、兵器を操るに堪能なる勇士の模範を作りき。執鎗者 Doryphoros 及ボルゲゼのアヒルレエス Achille Borghèse の像は其例なり。ポリクレイトスの根則は、四指の根に當る掌の幅 Palma を原尺としたりとはユウジェエヌ、ギヨオム Eugène Guillaume の說なり。基督前第四世紀の彫工リジッポス Lysippos は、ポリクレイトスの法を承けたりといへど、其權衡は一變したり。リジッポスが定めたる權衡は、秀麗優美の性を具へ、頭首の割合を小にし、身肢に脩長の姿を與へたり。アポクシオメノス Apoxyomenos、メレアグル Méléagre、殊更ベルヱデエルのアポロンの像は此範型に相當す。

頭高を以て原尺とする權衡法は、アウグスツス時代の羅馬建築家キトルキウス Vitruvius Pollio が書に出でたり。キトルキウスはリジッポスの根則を傳ふるものゝ如し。同じ根則は又ビッァンチウム藝匠の間に傳はりしが、第十四世紀の伊太利畫家チェンニノ、チェンニニ Cennino Cennini が畫論中には、これをビッァンチウム派より承けて人身の權衡を說きたる章あり。

復興期の技藝家は多くキトルキウスの則に從ひ、八頭高の法を用ゐたりき。中にもレオナルド、ダ、キンチは其則を示すべき一圖(第七十二圖)を遺したり。其圖は二重の人身を方形と圓形との中に入れて描きたるものなり。雙手を十字に張りて直立したる人體は、これを正方形の中に容れて、頭頂と足跛と兩中指の端とは正しく四邊に觸るべしとなす。同じ人體の位置を少しく改めて、更に兩手を高くし兩脚を開くときは、其手足の末端に觸れて圓を畫くべく、此圓周の



第七十二圖　レオナルド・ダ・キンチの權衡法

中心は臍に當るとなす。レオナルドは其方形中なる人物に線を劃して諸部の割合をも示したり。

其他人身の權衡を論じたる名家の書にはアルブレヒト・デュウレル (A. Dürer, Von der menschlichen Proportion. Nürnberg 1527)、シャン、クウザン (L'Art de desseigner de Maistre Jean Cousin. Paris, achevé d'imprimer en 1685)、ロマッゾオ (Traité de la proportion naturelle et artificielle des choses, par J. P. Lomazzo, traduit par H. Pader en 1649) ジェルディイ (Gerdy, Anatomie des formes extérieures du Corps humain. Paris, 1829) シャドウ (Gottfried Schadow, Polyklet oder von den Massen des Menschen etc. Berlin 1834 等あり。これらの書中にて最も簡明にして、現今までも技藝家の用ゐて便なりとするはクウザンの法なり。

クウザンが示せる割合は、レオナルドが圖中に見るものと大方符合したり。其原尺としたるは頭高なり。頭高とは、直立のとき顱頂より腮尖までの長さをいふ。頭高は更にこれを四部に等分して、其一部は鼻の長さに當るとなす。其割合は左の如し。

第一帶は顱頂より額の央に至る。或はこれを髮の毛ある處ともいへど一定せ

す。

第二帶は額の央より鼻根に終る。即ち眼の線、眉は此帶の中央にあり。

第三帶は鼻根より鼻下まで、鼻の全長。

第四帶は鼻下より顎尖までの長さとす。

右の割合中にて最終の部分、即ち鼻下より顎尖に至る長さと、眼の半位より取りたる鼻の長さとは少しく不同なる如し。實際に於ては、鼻下の長さ鼻の長さに超えたるが多し。

クウザンは又眼の平位を過る横線を五分して、其第二部と第四部とに眼を置けり。即ち鼻根の處、兩眼の距離は眼の幅に同じとせり。鼻底の幅を眼の幅に同じとし、口の幅を眼の幅の一幅半とし、耳の長さを眼線より鼻底に至る長さに同じとせり。

直立したる人身の、顱頂より地に至る高さを、頭高の八倍の長さに等しとして各部分を擧れば、

第一頭高は顱頂より腮の下邊に至る。

第二頭高は腮より乳頭に至る。但頭位の平にして、視軸亦地平なることを要す。

第三頭高は乳頭より臍の邊に至る。

第四頭高は臍より恥骨の邊に至る。

第五頭高は恥骨のあたりより腿の央に至る。

第六頭高は腿の央より膝の下方に至る。

第七頭高は膝より腓肉の下に至る。

第八頭高は腓肉の下より踝面に至る。

人身の横の長さも亦頭長を原尺とす。肩の幅は二頭の長さに同じく、腰の幅は一頭半に同じとす。上肢は頭長の三倍に當り、其二倍を肩節より手首の節までの長さとし、手首より中指の尖までを頭長に同じとせり。かくて伸雙臂尺、即ち肩幅及兩腕を伸べたる長さは八頭長にして、身長に同じきものとなるべし。

クウザンが右の根則の世にもてはやさるゝ所以は、總ての原尺を頭高に取りたると、其倍數の複數ならずして、割り出し易き八の偶數なるとに在り。

クウザンと略〻同じ時代なる、ミラノの畫家ロマッヅオが公にしたる權衡法はこれと殊なり。原尺は頭高を取らず、髮の生え際より顎までの面長を以てし、全身長を十面長となし、其割合を左の如く定めたり。

第一面長は顱頂より鼻の下底に至る。
第二面長は鼻下より胸骨叉に至る。
第三面長は胸骨叉より胸肉の下線に至る。
第四面長は胸肉より臍に至る。
第五面長は臍より恥骨部に至る。
第六面長は恥骨より股の中程に至る。
第七面長は股の中程より膝に至る。
第八面長は膝より下腿の中程に至る。
第九面長は下腿の中程より其下方に至る。
第十面長は下腿の下方より地に至る。

ロマッヅオが權衡法をジャン、クウザンの法に比するに、其相異なるところは、啻に原尺に在るのみならず、亦比尺の割合に在り。第一ロマッヅオが原尺としたる面長は、クウザンが頭高を四分したる其三を有せり。即ち三鼻長に當るなり。十面長に三を乘ずるときは全身長は三十鼻長となるべし。クウザンの八頭高を鼻長に改むれば三十二倍なり。さればロマッヅオの式は全身を七頭半の長さとなせるなり。

又ロマッヅオの權衡にては、膝より地までを三面長とすれば、クウザンのよりも此間に一鼻長多く、軀幹と股との長さに於ては各二鼻長を減せり。ロマッヅオは臍を鼻下と膝との中位に置き、クウザンはこれを顱頂と膝との中位に置くなり。

今解剖家の實驗に徵して、前に擧げたる古法の價値如何を察するに、八頭高の式は一米突八十仙米、我六尺以上の長身にあらでは正確なりといふを得ず。これより以下の身の丈にては、七頭半又は七頭の長さとなるべし。凡そ頭高なるものは人によりての差異意外に少きものなり。其平均實尺は二十二仙米乃至二十三仙米とす。甚しき異例にあらざる限は二十三仙米を超えず、又二十一仙米を降るとなし。八頭高の人は其骨格も大なりと見て、頭長平均數の大なるものを取り之を八倍せば（23×8＝1,m84）、其實尺一米突八十四か猶それより以上たるべし。八頭高は短身の人なるが故に、其頭長も小なるものを取りて七倍せば（22×7＝1,m54）其實尺一米突五十四か或はこれよりも多かるべし。斯く人により身長の長短如何に、從ひて頭高の比數に相違あるを思へば、強て

八頭高をあらゆる人物に採用せんは不可なるべし。古代の技藝家も必ずしも一定の權衡法をのみ用ゐたるにあらず。されば希臘の彫像に就きてその權衡を見るに、天然の人身を檢すると同じく差異あり八頭高の身長あるは格鬪力(グラディアト)士(オル)なるが、此像は四肢軀幹の伸びたる割に頭小に、一見して長身の人なるを感ず。他の名品中、ベルヱデエルのアポロンは七頭四分の三の身長にして、ラオコオンとアンチノウスとは共に七頭半を身長とせり。

凡そ人身の長さは人によりて驚くべき相違あること、何れの國、何れの時代にても然り。若し異例のものを索めば、身尺の平均數との過不及甚しきものあり。所謂巨人 Geant と矮人 nain とはいづれの世にもあるべし。「オルフイラ」博物館にある、カルムック人マルグラットの骨は其身長二米突五十三仙米に及び芬蘭人カイアヌスは二米突八十三仙米の身長ありきといふ。されば稀には平均尺より長ずること五十仙米乃至一米突に及ぶものもあるなり。

之に反する矮人の例を擧れば、波蘭王スタニスラスの宮中にありし著名なる侏儒は、身長八十九仙米に過ざりしが、彼れと略〻同じ丈の小女子ありて、夫婦の約をなせりといへり。猶これより甚しきは、同じ波蘭の士バルキロスキは、才智人に優れ體形も常に變ることなかりしに身長僅かに七十五仙米なりき。又英國王チャアレス一世の時、バッキンガム侯夫人は、皇后アンリエット、マリ、ド、フランスを饗したる食後の餘興に、ゼッフリ、ホッツソンと名くる侏儒を、蒸菓子の中に入れて食卓に上らしめたることあり。此人は二十歳にして、五十六仙米の丈なりきといふ。

此の如き個人の破格は姑く置き、巨人國、矮人國といふが如き民種はあるべからず。されど民種によりて身長の平均數に著るき差異はあるべし。佛國人の平均身長は一米突六十五にして、白耳義は一米突六十八、波蘭は一米突七十三、露西亞は一米突七十六に及ぶ。獨逸中身長の最大なるは索遜人なり。千七百八十年、この國の歩兵は平均一米突七十八の身長にして、榴彈歩卒(グレナディエエ)は一米突九十五に達したりき。南亞米利加のパタゴニヤ人及亞非利加黑人中には身長二米突を超ゆるものあり。短小の民種中最も甚しきは「ラポン」人にして、普通の身長一米突三十八とす。此他北極地方の住民なるグリヨオンランド人。「エスキモオ」、「サモイエド」等はいづれも短身を以て知らる。

民種によりて身長の差あるを頭高の比數にていはゞ、佛人は其身長七頭四分

の一乃至七頭半に等しかるべく、獨逸人及露西亞人は七頭四分の三乃至八頭、黑人中の長身なる種族は八頭若くは八頭四分の一を數へ、「ラポン」、「エスキモオ」等は六頭半或は六頭四分の三を身長とすべし。

日本人は世界の民種中短小なる部類に屬すべし。身長の平均數を索めなば、恐らくは七頭高以下なるべし。されど審美の準則よりいはゞ、七頭高を超えざる人體にては到底權衡の美を得べからず。假りに男子の標準身長を五尺二三寸、即ち一米突五十七乃至一米突六十とすれば、其比尺は七頭高一拇幅にして、左の如き割合を定むることを得べし。

第一頭高は腮尖に終る。

第二頭高は乳頭の平位に終る。

第三頭高は臍に終る。

第四頭高は大轉子下端の平位に終る。

第五頭高は膝蓋上端に終る。

第六頭高は孖肉々腹下の上一横指に終る。

第七頭高は地上一拇幅に終る。

兒身は大人に比すれば頭の割合大なり。是れ頭骨の發育は胴及四肢よりも早きが故なり。一年未滿の兒にては、四頭高乃至四頭四分の一を身長とし、六七歳にして五頭高又は五頭四分の一となり、十一二歳にして既に六頭高四分の一を算ふべし。

技藝家の殊更注意すべきは、人身長短の差別あるはおもに下肢の發育如何に在ることなり。頭及頸を合したる軀幹の長さは、人によりての差、比較的僅小なれども、腿と脚との長さは、長身と短身とにて其差殊に著るし。古人の定めたる權衡法にも、下肢を切りたる頭高の限界は分明ならざるところあり。或は股の央といひ、或は膝の下方といへど、股の上端をいづこと定むるにあらでは、明白なる一點を指すに由なし。就中人によりて異なるは、全身上下半截の中線の過るところなり。古人の說にても此中線をば唯恥骨のあたりと定むるのみ。解剖家の測りたる結果によれば、短身の人にては半截の中心恥骨より上にあり。歐人中位の身長にては、恥骨接合の下十三密米。即ち陰具の根に當れり。長身にてはそれより下に落ることあり。希臘彫像などにては此の如く作りたるもの多し。是れ丈高き人程、下肢の割合長きが故に、中線の位置益〻降りゆくなり。

サベイ Sappey が測りたる男女の手足の長さと頭長とを比較したる定尺は、知りて益あるべし。曰く、男の手は女の手よりも長きこと平均二仙米なり。之を面長に比すれば、女にては略同長なれども、男にては手の方長し。それと同じく、足長は男にては女より長きこと約三仙米なり。女の足長は頭高と略〻同尺なれど、男にては足の頭より長きこと凡十分の一なりと。

以上に示せる權衡の要則は、他の解剖上の知識と同じく、之を用ゐて直ちに作品の美術的特色を生ずべしとはいはず。すべて科學上の法則は、技藝家を導いて大なる過ちなからしめんとするものなり。決して技藝家の手腕を束縛すべきにあらず。科學の法則に通じて後、猶活現界の事物を觀察して、藝術上の技能を養成せんこと、偏に其人の力量如何に存ず。

全身筋肉概目

深層ノ小筋ヲ除ク

名稱	起	著	作用
前胸筋			
一、鎖骨下筋	第一肋軟骨	鎖骨外方下面	胸骨ニ對シテ鎖骨頭ヲ維持ス
二、小胸筋	肩胛烏喙突起前緣	第三第四第五肋骨外面	肩ヲ引下ゲ又吸氣ヲ行フ
三、大胸筋	鎖骨前緣內三分二、胸骨前面、上六個肋軟骨、第四、五肋骨外面、前腹腱膜上部	上膊二頭筋溝外唇	上膊ヲ前方ニ引寄セ且其上下動ヲナス
脇肋筋			
一、大鋸筋	第一乃至第八肋骨外面	肩胛內緣ノ全長	肩胛ヲ前下方ニ引キ其回旋ニヨリテ上肢ヲ上擧セシム
肚腹筋			
一、方形腰筋	第十二肋骨下緣、第一乃至第四腹椎橫突起外端	腸骨櫛內方	脊柱及ビ軀幹ノ左右屈
二、橫腹筋	最下六個肋骨內面、後腹腱膜、腸骨櫛內唇前四分三	前腹腱膜	腹腔ヲ壓迫ス
三、小斜腹筋	後腹腱膜、腸骨櫛前四分ノ三腸恥靱帶外三分ノ一	最下三肋骨、前腹壁膜	兩側ノ動ハ軀幹ヲ前屈シ一側ノ動ハ肚腹ヲ動側ニ向ハシム
四、大斜腹筋	最下八肋骨外面	腸骨櫛外唇ノ前半部、腸恥靱帶及前腹腱膜	兩側ノ動ハ軀幹ヲ前屈シ一側ノ動ハ肚腹ヲ反對側ニ向ハシム
五、直腹筋	第五、六、七肋軟骨	恥骨棘	軀幹ノ前屈

六、三稜腹筋	前筋下方ノ白線	恥骨内端
後側軀幹筋		
一、大錯綜筋	第二以下各頸椎ノ關節突起及横突起、第一二胸椎棘、最上六胸椎横突起	後頭骨上下半月狀線間ノ粗面
二、小錯綜筋	最下四頸椎横突起	顳顬骨乳嘴突起端及ビ其後緣
三、夾板筋	項靭帶、第七頸椎棘及ビ最上五胸椎棘	乳嘴突起外面後半部及ビ後頭上半月狀線外三分一(頭夾板筋)最上三頸椎横突起後部(頭夾板筋)
四、脊柱筋	最下五頸椎横突起後部、各肋骨隅外方(腸肋筋)○(A)各腹椎横突起及各肋骨結節、(B)各胸椎及腹椎横突起結節(背長筋)	深層ハ腱膜トナリテ腸骨後上棘及附近ノ腸骨櫛部ニ止リ、○一部ハ薦骨後面、各腹椎棘ニ止ル
五、上小鋸筋	項靭帶、第七頸椎及上三胸椎棘	第二、三、四、五肋骨外面肋骨隅ノ外方
六、下小鋸筋	最下二胸椎及最上三腹椎棘	最下四肋骨下緣
七、菱形筋	項靭帶下部、第七頸椎及上五胸椎棘	肩胛内緣全長
八、肩胛隅筋	最上四頸椎横突起後結節	肩胛内緣棘根ノ上部
九、濶背筋	最下六胸椎及各腹椎棘、薦骨棘、腸骨櫛後三分一、最下三肋骨外面	上膊骨二頭筋溝底
十、僧帽筋	後頭骨上半月狀線内三分一、項靭帶、第七頸椎及最上十胸椎棘	鎖骨上緣外三分一、肩胛骨肩峰及聽ノ上緣全長
肩胛筋		

一、肩胛下筋	肩胛内窩全面	上膊骨小結節
二、棘上筋	肩胛棘上窩	上膊骨大結節(上面)
三、棘下筋	肩胛棘下窩	同　上　(中面)
四、小圓筋	同上腋緣ノ附近	同　上(下小面)
五、大圓筋	肩胛後面外下部	上膊二頭筋溝内唇
六、三角筋	鎖骨前緣外三分一、肩胛骨肩峰外緣及棘ノ下緣	上膊骨中部粗面
上膊前側筋		
一、烏喙膊筋	肩胛骨烏喙突起尖端	上膊内面中三分一
二、内膊筋	上膊前隅及ビ内外面	尺骨烏喙突起下方
三、二頭膊筋	肩胛骨關節窩上緣(長頭)同骨烏喙突起前端(短頭)	橈骨結節後半部
上膊後側筋		
一、三頭膊筋	肩胛骨腋緣ノ上部關節窩ノ下(長頭)○上膊後面螺旋溝上部(外頭)○螺旋溝下部(内頭)	尺骨鷲嘴突起上部及後部
前膊前側筋		
一、覆手方筋	尺骨内緣及ビ前面下四分一	橈骨前面及ビ外緣下四分一
二、深層屈指筋	尺骨内面及ビ前面上三分二、骨間靭帶	示指ヨリ小指マデ各指骨第三節

上膊ノ内旋	上膊ノ内方ニ誘フ	上膊ノ上擧ヲ助ケ且之ヲ前
上膊ノ外轉及ビ上擧	上膊ニ對スル前膊ノ屈	尺骨烏喙突起下方
上膊ノ外旋	前膊ノ屈及ビ反手、長頭ハ肩胛ニ對シ上膊ヲ維持ス	橈骨結節後半部
同　上	上膊ヲ後方ニ引キ且之ヲ下擊ス	上膊ノ地平擧ヲナシ且之ヲ前後ニ誘フ
上膊ニ對スル前膊ノ伸		
前膊ノ覆手動	指骨末節ノ屈筋ニシテ又指及手ノ屈ヲナス	頭ヲ後屈シ顔面ヲ反對側ニ向ハシム
頭ヲ側屈ス	頭ヲ後屈シ又側屈シ顔面ヲ動側ニ向ハシム	軀幹ノ伸及ビ側屈
肩胛ヲ中線ニ引寄セ且之ヲ上方ニ擧ゲ回旋ヲナサシム	肩胛ヲ内上方ニ引ク	上三分一ハ肩胛ヲ後方ニ引キ寄セ軀幹ノ伸ヲ生ズ下三分二ハ肩及ビ上膊ヲ下擊ス
上部ハ頭ノ後屈及左右屈、中部ハ肩ヲ引擧ゲ、下三分一ハ肩ヲ下擊シ肩胛ヲ中線ニ近ヅク		

三、固有屈拇筋	橈骨前面上四分ノ三及ビ骨間靱帶ノ一部	拇指骨第二節
四、淺屈指筋	上膊内上顆、尺骨烏喙突起内方、橈骨前面ノ斜線	各指骨中節前面ノ兩側
五、覆手圓筋	内上顆及ビ上膊内緣ノ一部、尺骨烏喙突起内方	橈骨外面中部ノ粗面
六、大掌筋	上膊内上顆	第二掌骨基底
七、小掌筋	同　上	腕環狀靱帶及ビ掌腱膜
八、前尺骨筋	内上顆、鷲嘴内緣及ビ尺骨櫛	豌豆骨及ビ第五掌骨基底
前膊外側筋		
一、短反手筋	上膊外上顆、肘關節外側靱帶及輪狀靱帶、尺骨小半月截痕下方	橈骨上三分一ノ間斜線ノ上方
二、長反手筋	上膊外緣下三分一	橈骨莖狀突起基底
三、第一橈骨筋	上膊外緣ノ下方	第二掌骨基底後面
四、第二橈骨筋	上膊外上顆	第三掌骨基底莖狀突起部
前膊後側筋		
一、長外轉拇筋	尺骨及ビ橈骨後面	拇指掌骨上端
二、短伸拇筋	橈骨後面	拇指骨第一節基底
三、長伸拇筋	尺骨後面	拇指骨第二節

		拇指及其末節ノ屈
		指骨中節ノ屈又指及ビ手ノ屈
		覆手及ビ前膊ノ屈
		前膊ニ對スル手ノ屈
		同　上
		手ノ屈筋ニシテ其内緣ヲ前方ニ誘ナフ
		前膊ノ反手動
		上膊ニ對スル前膊ノ屈及ビ半覆手動
		前膊ニ對スル手ノ伸及ビ外轉
		前膊ニ對スル手ノ伸
		第一掌骨ヲ前外方ニ引ク
		拇指骨ヲ引キ第一掌骨ノ外轉ヲ行フ
		拇指骨及ビ第一掌骨ヲ引キ之ヲ後方ニ反ラス

四、固有示指伸筋	尺骨後面前筋附着ノ下方	指骨ノ伸及ビ手ノ後屈
五、總指伸筋	上膊外上顆	前膊ニ對スル手ノ伸及ビ内轉
六、固有小指伸筋	同　上	上膊ニ對スル前膊ノ伸ヲ助ク
七、後尺骨筋	外上顆及ビ尺骨櫛	背骨間筋ハ指ノ外轉、掌骨間筋ハ指ノ内轉
八、小肘筋	上膊外上顆	指骨第一節ノ屈
手筋		拇指掌骨ノ内轉
一、背及掌骨間筋	各掌骨ノ兩側緣	拇指掌骨ノ屈及ビ内轉
二、蟲樣筋	深屈指筋各分腱ノ外側	拇指骨第一節ノ屈又指及ビ手ノ前内方ニ誘ナフ
三、短内轉拇筋	巨骨前面、第三掌骨前面ノ全長、第二掌骨ノ上部	前ニ同ジ
四、對小指拇筋	大富稜骨ノ前面及ビ環狀靱帶ノ一部	第五掌骨ノ屈
五、短屈拇筋	大富稜骨及ビ環狀靱帶	小指首節ノ屈
六、短外轉拇筋	舟狀骨突起及ビ大富稜骨、環狀靱帶ノ一部	
七、對拇小指筋	鈎狀骨	
八、短屈小指筋	鈎狀突起	
九、短外轉小指筋	豌豆骨	
	總指伸筋示指分腱ト合ス	
	示指ヨリ小指マデ各指骨中節ノ基底及ビ第三節	
	總指伸筋小指分腱ト合ス	
	第五掌骨基底	
	鷲嘴外緣及尺骨後面ノ一部	
	各指骨第一節上端ノ兩側	
	各指骨第一節上端ノ外側	
	拇指第一節上端内側ノ種子骨	
	拇指掌骨外緣及ビ前面	
	拇指第一節上端	
	拇指第一節上端外側	
	第五掌骨前面ノ全長	
	小指第一節基底	
	小指第一節基底尺側	

十、皮下掌筋	環狀靱帶及ビ掌腱膜內側	手掌內緣ノ皮膚	
骨盤筋			
一、腰腸筋	腹椎ノ全長椎體ノ兩側及ビ橫突起前面(大腰筋)、腸骨內窩(腸骨筋)	大腿骨小轉子	骨盤ニ對スル股ノ屈及ビ外旋
二、三稜股筋	薦骨前面坐骨截痕ノ上部	大腿骨大轉子ノ上部	股ノ外轉及ビ外旋
三、內鎖筋	腸骨內面膣孔ノ周圍及ビ鎖閉靱帶、坐骨ノ上部及ビ坐骨棘	同上前筋附着ノ下方	股ノ外旋
四、方形股筋	坐骨ノ外緣	大腿轉子間粗線	股ノ外旋
五、外鎖筋	腸骨外面膣孔ノ周圍及ビ鎖閉靱帶	大腿轉子窩	股ノ外旋
六、小臀筋	腸骨外窩前牛月狀線ヨリ下部	大腿大轉子前上部	股ノ外轉及ビ廻旋
七、中臀筋	腸骨外窩前後牛月狀線間ノ粗面、腸骨櫛外唇ノ前四分ノ三及ビ前上棘	大轉子外面	前ニ同ジ
八、大臀筋	腸骨外窩ノ最後部、薦骨ノ外部、尾閭骨ノ側緣、大薦坐靱帶後面	大腿粗線ノ外枝及ビ股輜腱膜	骨盤ニ對スル股ノ伸
大腿前側筋			
一、四頭股筋	腸骨前下棘及ビ髀臼ノ上緣(前直股筋)○大轉子基底及ビ粗線ノ外唇(外大股筋)○粗線ノ內唇(內大股筋)大腿骨前面及ビ外面(中大股筋)	膝蓋骨上緣兩側緣及ビ前面、又膝蓋靱帶ヲ以テ脛骨前結節	股ニ對スル脚ノ伸又前直股筋ハ股ニ對スル骨盤ノ屈ヲ助ク
二、股鞘張筋	腸骨前上棘	大轉子前下方ニ於テ股輜腱膜ニ移リ下方ハ脛骨外結節ニ赴ク	骨盤ニ對スル股ノ屈及ビ內旋
三、縫匠筋	腸骨前上棘	脛骨前結節ノ下方脛骨櫛上部	股ニ對スル脚ノ屈及ビ內旋又骨盤ニ對スル股ノ屈

大腿內側筋			
一、恥骨筋	恥骨地平枝	大腿粗線ノ內枝	股ノ內轉、屈及ビ外旋
二、第一內轉筋	恥骨棘	大腿粗線ノ內唇上三分一	前ニ同ジ
三、第二內轉筋	恥骨棘ノ下方	大腿粗線ノ內唇上三分一	前ニ同ジ
四、第三內轉筋	恥骨下行枝及ビ坐骨結節	大腿粗線ノ內唇全部及ビ內髁ノ結節	股ノ內轉及ビ屈
五、內直股筋	恥骨下行枝	脛骨櫛ノ上部	股ノ內轉、脚ノ屈及ビ內旋
大腿後側筋			
一、二頭股筋	坐骨結節(長頭)○大腿粗線外唇ノ中部(短頭)	腓骨小頭	股ニ對スル脚ノ屈及ビ外旋、骨盤ニ對スル股ノ伸
二、半膜樣筋	坐骨結節下方	脛骨內髁ノ後上方ヨリ前一方ニ赴ク	股ニ對スル脚ノ屈及ビ骨盤ノ伸ニ於ル股ノ伸
三、半腱樣筋	坐骨結節	脛骨櫛ノ上部	股ニ對スル脚ノ屈及ビ內旋、骨盤ニ於ル股ノ伸
下腿前側及外側筋			
一、前脛骨筋	脛骨外結節及ビ同骨外面上三分ノ二	第一楔狀骨內面及ビ第一蹠骨基底	脚ニ對スル足ノ屈及ビ內轉
二、長伸蹠筋	腓骨內面ノ前部中四分ノ二及ビ骨間靱帶	拇指骨第二節基底	蹠指ノ伸及ビ足ノ屈及ビ內轉
三、長總趾伸筋	脛骨外結節、腓骨內面上四分ノ三	蹠指ノ外各指骨中節及ビ末節○第五蹠骨基底(前腓骨筋)	蹠指ノ伸、足ノ屈及ビ外轉
四、短腓骨筋	腓骨ノ外面下三分ノ二	第五蹠骨塞狀突起	足ノ伸及ビ外轉

五、長腓骨筋	腓骨小頭及ビ其外面上三分ノ一	
下腿後側筋		
一、膝腸筋	大腿外髁外側ノ溝	
二、後脛骨筋	脛骨斜線及ビ同骨後面ノ最外部、骨間靭帯ノ後方ニアル腓骨ノ内面	
三、長總趾屈筋	脛骨斜線及ビ同骨後面中三分ノ一	
四、長屈蹈筋	腓骨後面下三分ノ二	
五、三頭腓腸筋	大腿骨内踝後上部、同髁上方ノ結節、同内面ノ溝（内孖）○外髁ノ後外部、同髁上ノ結節（外孖）○腓骨ノ頭及ビ其後面ノ上三分ノ一、脛骨斜線及ビ其内縁中三分ノ一（腹底筋）	
六、長足蹠筋	大腿膝腸面ノ外部外髁ノ上方、臺靭帯ノ後壁	
足背筋		
一、背骨間筋	其數四、第一ハ蹈指蹠骨基底ノ外縁及ビ第二蹠骨ノ内縁○第二以下ハ各蹠骨ノ對向縁	第一蹠骨基底下面ノ外側
二、短總趾伸筋	踵骨前方ノ距踵窩	脛骨後面斜線ノ上部
足蹠筋		舟狀骨内側ノ結節
一、蹠骨間筋	其數三、第三ヨリ第五マデ各蹠骨ノ内縁	蹈指ノ外各足指骨爪節基底
二、内轉蹈筋	骰子骨前内方、第三及ビ第四蹠骨基底（斜頭）、第三指以下蹠趾關節嚢靭帯（横頭）	蹈指爪節基底
三、蟲樣筋	長總趾屈筋各分腱ノ内側	各趾首節基底ノ上内側
四、方形足蹠筋	踵骨下面	長總趾屈筋腱ノ外縁
五、短總趾屈筋	踵骨下面内後結節ノ前部	分腱ヲ以テ四趾骨ノ各中節兩側
六、短屈蹈筋	第三楔狀骨下面	蹈指首節基底ノ兩側（内種子骨及ビ外種子骨）
七、短外轉蹈筋	踵骨下面内後結節及ビ舟狀骨結節	蹈指首節基底ノ内側（内種子骨）
八、短屈小趾筋	第五蹠骨基底	小趾首節基底ノ外側
九、對蹈小趾筋	同　上	第五蹠骨外縁
十、短外轉小趾筋	踵骨ノ外結節	第五蹠骨莖狀突起及ビ小趾首節基底ノ外側
頸筋		
一、前斜角筋	第三ヨリ第六マデ各頸椎横突起前結節	第一肋骨上面ノ結節
二、後斜角筋	第二以下各頸椎横突起後結節	第一肋骨上面及ビ第二肋骨上縁
三、頤舌骨筋	下顎骨内頤棘	舌骨體上部
四、顎舌骨筋	下顎骨内面内斜線	正中線ニ於ル縫線狀腱及ビ舌骨體
五、莖狀舌骨筋	顳顬骨莖狀突起	舌骨體外側
六、二腹顎筋	前腹ハ下顎骨ノ二腹筋窩、後腹ハ乳嘴突起二腹筋截痕	腹間ノ腱ハ腱膜環ヲ以テ舌骨上縁ニ定着ス

第二蹠以下各趾首節ノ屈	足蹠ニ於テ長總趾屈筋ノ牽引力ヲ補足ス	股ニ對スル脚ノ屈及ビ内旋
各指中節ノ屈		足ヲ内轉シ且之ヲ屈伸ノ中位ニアラシム
蹈指首節ノ屈		足指末節ノ屈及ビ足ノ伸
蹈指ノ外轉		蹈指末節ノ屈
小趾首節ノ屈		脚ニ對スル足ノ強力ナル伸、同時ニ足尖ヲ内方ニ旋轉ス
小趾ノ外轉		各指ノ外轉
第一肋ヲ上擧シ若クハ頸柱ヲ側屈ス		各指ノ伸
前ニ同ジ		第二趾ニ向ッテ第三趾以下ノ内轉
舌骨ヲ上擧ス		蹈指ヲ第二趾ニ近ヅク
前ニ同ジ		
舌骨ヲ上後方ニ引ク		
舌骨ヲ上擧シ之ヲ前後ニ動カス		

七、胸骨甲狀筋　胸骨又ノ後面　甲狀軟骨斜線　喉頭ヲ引下グ

八、甲狀舌骨筋　甲狀軟骨斜線　舌骨ヲ引下グ又ハ喉頭ヲ引擧グ

九、胸骨舌骨筋　胸骨及ビ鎖骨頭ノ後面　舌骨ヲ引下グ

十、肩胛舌骨筋　舌骨體下緣　肩胛骨上緣　前ニ同ジ

十一、胸鎖乳嘴筋　胸骨又ノ前面（胸骨肉束）、鎖骨上面內三分ノ一（鎖骨肉束）　顳顬骨乳嘴突起外面、後頭骨上半月狀線外三分ノ二　頭ヲ動側ニ傾ケ顏面ヲ反對ニ向ハシム、兩側ノ動ハ頭ヲ後屈シ且前進セシム

頭筋

一、咬筋　顴弓ノ下緣　下顎骨枝下方ノ外面　下顎ヲ上擧ス

二、顳顬筋　顳顬窩ノ全部　下顎骨烏喙突起端　前ニ同ジ

頭及頸皮筋

一、前頭筋　後方ハ後頭筋ヲ以テ後頭骨上半月狀線ヨリ起リ帽狀腱膜トナリテ頭蓋ヲ蔽ヒ前頭部ニ至リ肉質ヲ生ズ　眉及鼻根ノ外皮　眉ヲ引擧ゲ眼ヲ開キ額ノ皮ニ橫線ヲ生ズ、注意及驚愕ヲ表ス

二、眉筋　前頭骨眉丘　眉ノ中部外皮

三、眼瞼輪匠筋（內圍）　即チ眼瞼部ハ內眼瞼靱帶　外眼瞼靱帶

同　上（外圍）　即チ眼窠部ハ眼窠ノ骨緣ニ起リ　上方ハ眉ノ外皮、下方ハ頰部ノ外皮ニ止ル

四、三稜鼻筋　鼻骨下部前面　鼻根ノ外皮

五、橫鼻筋　鼻梁ノ中線ニ於ケル鼻軟骨　鼻翼ノ上部及後部ナル頰ノ皮下　眉頭ヲ內方ニ引擧ゲ眉線ヲ下方ニ斜降ス、苦惱ヲ表ス　上下眼瞼ヲ動カシ眼ヲ閉ヅ　上部ハ眉ヲ引下ゲ額波ヲ消滅シ深考ヲ表ス、下部ハ下瞼ヲ膨起セシム　眉頭ヲ引下ゲ鼻根ノ邊ニ數箇ノ橫皺ヲ生ズ　鼻翼ヲ前上方ニ引キ鼻側ニ縱皺ヲ生ズ

六、犬齒筋　上顎骨犬齒窩、下眼窠孔ノ下方　口角ヲ少シク內方ニ擧上シ犬齒ヲ露出ス

七、內上唇擧筋　上顎骨犬齒窩、前筋ノ內方　鼻翼及ビ鼻唇線ヲ上方ニ引ク、悲哀ヲ表ス

八、外小唇擧筋　上顎骨眼窠緣ノ前面　鼻唇線ノ中部ヲ引キ下凹ノ弧ヲナザシム、悲哀ヲ表ス

九、小顴骨筋　顴骨ノ前下部　前筋ニ類似ス

十、大顴骨筋　顴骨ノ外端顴弓ノ上緣　口角ヲ上外方ニ引キ頰部ヲ膨起シ下瞼ノ外隅ニ壓ス、歡喜ヲ表ス

十一、環口筋　橫行ノ纖維ヲ以テ口圍ヲ環擁ス　內圍ハ口ヲ括約シ外圍ハ上下唇ヲ壓平シ前ニ突出セシム

十二、喇叭筋　上顎骨及ビ下顎齒槽部ノ前面　口角ヲ直ニ外方ニ引キ或ハ口腔ニ充タセル空氣ヲ驅出ス

十三、方頤筋　下顎骨外斜線　下唇ノ外皮　下唇ヲ前方ニ反出シ深溝ヲ生ゼシム、憎惡ノ感情ヲ表ス

十四、三角頤筋　下顎下緣　口角ノ外皮

十五、皮下頸筋　大胸筋ノ上部及ビ三角筋內方ノ筋膜　頰及ビ下唇ニ於テ他ノ皮筋ト混ズ　口角ヲ外下方ニ牽引ス、不平其他ノ惡感ヲ表ス　下唇ヲ下方ニ引キ頸ノ皮膚ヲ張リ橫皺ヲ生ズ、恐怖煩悶ノ表情ヲ顯著ナラシム

明治三十六年二月二十日印刷
明治三十六年二月二十八日發行
明治三十八年十二月十三日再版訂正增補發行

定價金七拾錢

著者　東京市麻布區飯倉片町六番地　久米桂一郎
發行者　東京市本所區横綱町二丁目十一番地　古作勝之助
印刷者　東京市日本橋區兜町二番地　金澤求也
印刷所　東京市日本橋區兜町二番地　東京印刷株式會社
發行所　東京市神田區連雀町十八番地　畫報社

— 版權所有 —

賣捌所

丸善株式會社書籍店
東京堂書房
東海堂
北隆館合資會社
三輪伊六
盛春堂
良明堂
山田直三郎

86
3631

終